

通信

東京だより

田中生



肅啓 燒野ヶ原のバラック生活も、災前に劣らざる正月氣分の裡に暮れ申候、再び大地震が襲來するとの豫言にて尠なからず神經を惱し居候都民は、十五日の強震に遭遇し、夜も未だ明けやらぬ折のことゝて客歲に於ける地震以上に感じたる者多く、之に依つて一層將來を按じ出し、氣早の連中は當地を去るもの尠ならず、爲に復興事業の促進に影響する所なきや懸念に不堪候、是を動機として強震の再襲を臆面もなく公言する學者有之候へ共現代の科學を以てしては、豫知し能はざる事實を、僅小なる推理判斷に依つて豫言するが如きは、幼稚なる人心を動搖せしむるものにして、社會秩序の維持上、學者の言辭を弄するの無責任を責めざるべからず候、内閣は交迭し、多數の頭顱を擁して多年天下に跋扈したる

政友會も、遂に分裂の悲境に陥り政界益混亂せんとするのとき、清浦内閣は第四十八議會を解散せしめて陳笠連の腰を折り痛快の如くに被感候へ共一方英國議會が政府不信任案を提出してマゴドナル氏が所謂勞働内閣を組織したるに比較するときは、彼我選庭の甚しきに驚くと同時に、兩者の政治が國家生活に反映する所も果して徑庭を生ずるやは今後吾人の重視せざるべからざる所と存候

災後に於ける市内道路は、地下埋設物整理の爲に隨所に於て堀鑿せられ、其の跡始末が完全に行はれず、電車線路の敷石は剥れた儘に放棄せられて路面は各所、否な到る處に凹凸を生じ、折角國庫の補助を受けて鋪裝したる僅少の道路も、その維持に缺くるが爲に、一朝風雨の節は、夫れこそ紅塵天に漲り咫尺を辯せざる狀況にして、道路法も軌道法も施行せられざる状態に有之、吾人は幾度か市道路局の活動を要求し

て已まざりしも一向改良せられざるは勿論その維持修繕さへ行はれず、今は餘りのことに言ふべき言葉を有せず候、奇辯家は之を以て當然の事とし、東京市は都市計畫法の行はる、都市に非ずして、特別都市計畫法を施行する地なるが故に道路法軌道法が施行せられざるは勿論特別扱なるを以て道路の管理の如きは論ずべきものでなく、歐米都市に於けるが如き施設を要路するものが却つて無理なりと申居候得共、吾人都市民は奇辯家の奇辯に任せ一笑に附する能はざる生活上の重大事件にして如何なる手段を以てするも市當局の怠慢を責めざるべからず候、市内道路の近況此の如きものなるを以て惡路の研究を爲さむとする人士は益々現時の當地道路を視察するに加くはなく、年度末旅費の剩餘を有する地方道路職員は、此際當地に來て此惡路を研究し之が改良意見を市當局に建言せられ候はゞ、世評に所謂花見旅行とも相成不申して、東京市は勿論國家に貢獻する所多大なるものと存候

市内道路の現状此の如きものなるに、一方道路を利用する自動車は異常の勢を以て増加し、震災前五千七十八臺なりしものが、災後九千六百六十五臺に増加し、之に東京市電氣局の經營する乗合自動車一千臺とを加ふるときは、一萬臺を突破する狀況にして、道路の破損を招致するの主な原因は、此

自動車増加にあること疑無之候、交通の利便を増進するが爲には固より自動車の發達を希望する所に候へ共、自動車が今日の如く道路を破損するに方つては、何とか之が調節を圖る必要有之候、然るに釐毫も市内道路費を負擔せざる東京府が自動車に對して雜種税を賦課し、道路費用を負擔する東京市は僅に之に對し附加税を賦課するに過ぎずして、市財政が道路費用の負擔に苦しむのも無理からざる義と被存特別制度の施行が八ヶ間敷主張され候も畢竟是等の不條理なる制度を變更せむとするに在りて、理由あること、は存候得共、其の制度は何時實行せらるゝや計り難く、都制の施行まで道路の效用を廢止するを得ざるを以て、東京府も下級公共團體の財政に同情して、之が徵税を市に移すが正當と被考、現行地方税制を改正するの切に急なることを感じ申候、斯く改正するに於ては常に自動車業者が主張する車税減額問題も幾分か緩和され、市は道路費用の財源を増加して得策と存候得共此點に關し府も市も其の日暮しに打過ぎ居候は聊か市政に對する誠意を疑はざるを得ざる所に候

自動車増加と相竝て其の他の諸車も著しく増加し、爲に交通上の事故も車輛の増加歩合に伴うて増加し、大正十二年中に於ける事故を觀るに、自動車の爲にする被害死亡七十一

人、負傷千九百三十四人、電車の爲にする被害死亡四十二人、負傷千三百十九人、其の他の諸車の爲にする被害死亡三十人、負傷三千二百三十九人と言ふ驚くべき數字を示し居候、一萬臺の自動車交通を觀る本年度に於ては一層の被害を發生するに至るべく、三晝夜に七萬人を燒死せしめたる帝都のことに付、一年を通して百四十三人の死亡は言ふに足らざること、冷笑する人も可有之とは存候へ共、此の如きは人道上の問題として吾人の看過すべからざる所に有之最善の努力を盡して事故の妨止に力め度警視廳が震災前に於て六百五人の交通巡查を配置したるも尙十分ならずとし、大正十三年度に於ては七百九人を配置する趣に付聊か吾人の意を強くする所に候へ共尙充分と言ひ難きを以て更に大計畫を樹て交通の安全を期せられ度希望して已まざる處に御坐候

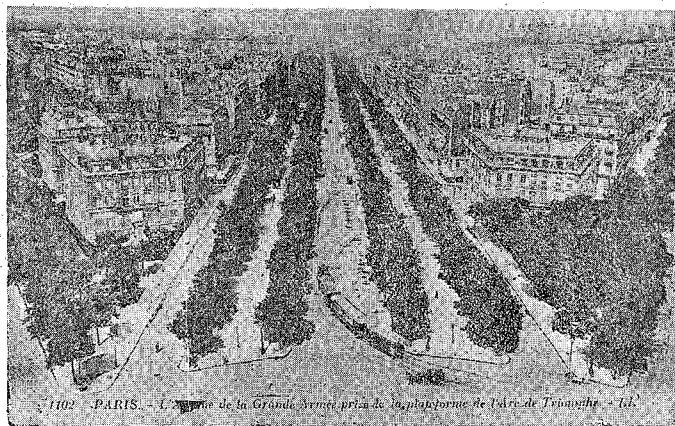
匆々 敬具

堀田副會長の鼻

堀田副會長。説明するまでもない、前内務次官であつて、本會副會長である、堀田貢氏のことである、病の爲に官を退き靜養して居られたが、此頃元氣回復して、來る四月に神戸で開會する港灣協會の總會には出席して、例の高聲を發することを快諾された想であるから、病氣の方は大丈夫であるが——と言つて、大丈夫になられたから、悪口を言ふのではないが、あの偉大な體軀と、あの惠比須サン顔の所有者に、鼻の高さの計量を要求するのは無理かも知れない(奥様には内秘)併し益々鼻が高くなつた實例が度々ある。今左に最近の一例を紹介しやう

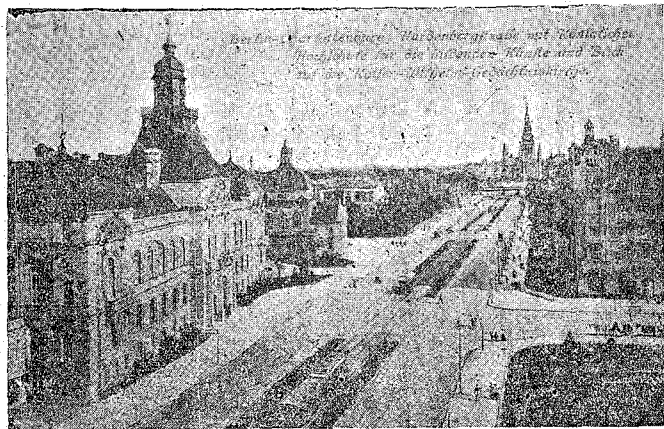
夫れば大正八年に本會が東京市路面改良計畫を調査して、時の市長や内藏兩大臣に財政計畫のことまで建議したことがある、其の時に論議されたのは自動車税のことで大正九年度に、二千五百七十臺の自動車、如何なる歩合で發達して行くかを問題であつた。本會の計畫は堀田氏の差圖によつて、既往五年間の發達歩合を調査し、前途を卜し大正十三年度には八千臺としたのであつたが、その建議が東京市道路評議會から内藏兩省の各所で論議せらるゝに方つて、その豫想は過大なりとの批難を受けた、きかぬ氣の堀田氏、何としても承知しない。そこで衆論一決して、理論を基礎にする堀田氏の計畫に賛成したのであつたが、恰度論議せられた大正十三年は來た、見給へ一萬臺になつたではないか。是が堀田氏の鼻を益々高くした所以である。

世の中はメーソーでも暮らせるし、理論的でも暮らせる、成ることなら理論的で行きたいとは僕等の理想であつた、理論的の堀田氏が、此度の勝を占めて居ることば、ドチラかと言へば理論的に走りたい僕等を叫ぶ一事實を捕へたのである、オイ、そこの鼻の低い先生。低い鼻を隆鼻術やら、神かけてまで高くしやうと思へば理論で来い。(夕の字)



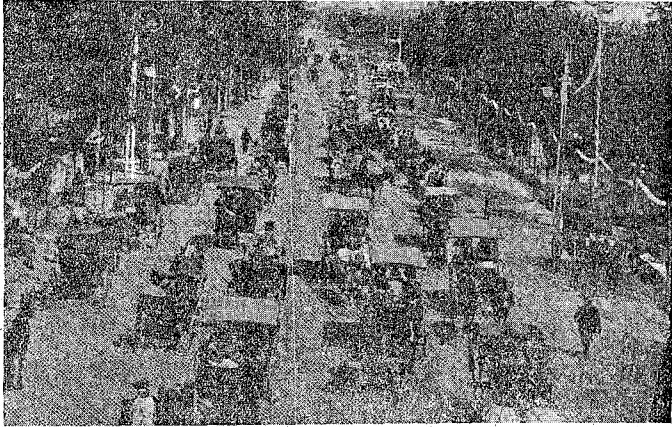
1102 PARIS. - L'avenue de la Grande Armée prise de la place de la Bastille de l'Arc de Triomphe - 1871.

(てに里巴國佛) 望觀の街ミルアドンラクリよ門旋凱

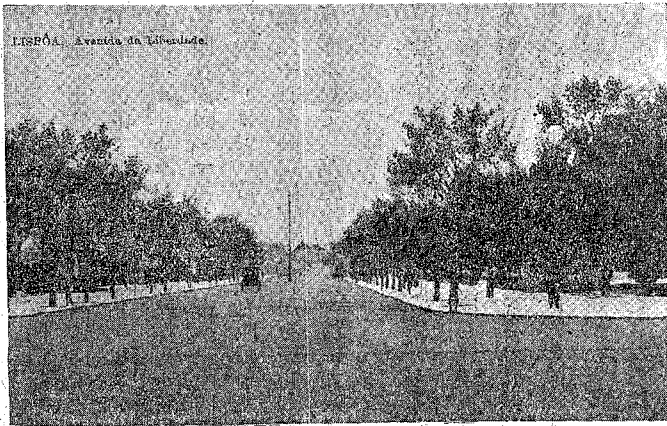


Berlin - Unter den Eichen - Hardenbergstrasse mit der Berliner Hauptkirche am Ende - Mitte und Ende der 18. und 19. Jahrhunderts - 1871.

街「ガルベンタルガ」の「ヒルブンテツロヤシ」市林伯
イウは塔高る見にか逢たま校學門專等高はるな方左
(信通州歐御技藤佐)候座御に院寺念記帝皇ムルヘル



路大ドアルペリ ダ ダニベア市「シホスリ」牙葡



(道外郊の市アリピセ) 然整通交 美婉木並 潔清面路